随筆部門選評

毎年、九月にはいると、「今年はどんな作品が・・・」との思いが徐々に高まってきますが、今年も作品を書いて頂いた方の多種多様な経験、生き方、考え方、そして何より、前向きに人生に対峙しておられるに姿勢に強く感動を頂きました。特に、今年はコロナ以前の生活に戻り始め、じっくり取り組まれた個性的な内容の作品が多くなったと感じました。

今年度の応募は二十七作品でした。（オンラインによる応募は十九作品）三作品が手書きによる応募でした。内容は個性あふれるものが多く、多岐に渡っており、どの作品も確かな筆力を基に、読み応えがありました。とりわけ、書きたい内容を明確にし、文全体の構成を考えてまとめてあるため、内容が分かり易く、スムーズに入ってくる作品がいくつもありました。さらに、意味段落を意識して各段落をまとめておられる方が多くなってきており、うれしく感じました。また、書き出しを工夫したり、比喩表現を取り入れたりして、自分の思いが読み手に伝わるよう工夫が凝らされた作品がいくつもありました。

これだけの表現力、筆力がある中、少し残念に思うこともいくつかありました。一つは、書きたい内容が多くあり、盛り込みすぎるということです。読むには面白いのですが、内容が多くなりすぎて主題に迫り切れないことが出てきてしまっています。もう一つは、書いていただいた各作品には筆者の人となりが出てしまいます。謙虚な姿勢をもち、学んでいる自分の成長する姿をこそ描きたいと思います。そうして、できれば未来に向け明るく締めくくりたいですね。

今年度も広域でしかも幅広い年齢層から応募いただきました。県内から十一点(大垣市内二点)、県外からは十六点ありました。遠くは北海道や佐賀県からの応募もありました。年齢別では、八十代二名、七十代七名、六十代六名、五十代七名、四十代二名、三十代二名でした。（不明一名）今年は五十代の方から多数応募があり、応募者の年齢層が下がりました。これから先の取り組みに期待が高まります。

選外にはなりましたが鎌田誠さんの「小さな本屋」は、学生時代の本との出会いが定年後の人生も支えており、本屋が果たしていた社会的、文化的な役割を考えさせる作品になっています。五十嵐修さんの「航空書簡薔薇が好きだったダフネ」は偶然出会ったヒッチハイカーの娘の母との三十年にわたる航空書簡の話です。娘を思う母親の愛情と筆者の誠実さが伝わってきます。今枝明子さんの「義父の山茶花」は山茶花を中心に据え、義父の思い出を綴っています。思いやりながら生きる、家族の姿が浮かんできます。

どの方も様々な工夫を凝らし、よりよい作品を作り上げようとされていました。真摯な取り組みに心から敬意を表すとともに、来年度も生活を見つめた感動ある作品の応募を期待しています。

文芸祭賞「とうもろこしパーティー」

宮島　早苗代

子や孫に支えられて収穫したトウモロコシなどを材料に、多くの人を迎えてパーティーが開かれます。楽しい雰囲気が生き生きと伝わってきます。そして、その真ん中で動いている筆者の姿からは、温かい人柄が浮かんできます。八十一歳。あっぱれと拍手をおくりたい心温まる作品です。

秀作「できれば名医にかかりたい」

秋谷　進

「名医にかかりたい」とのタイトル通り、全文を通して誰もが思う思いを、具体的な事実をもとに描いています。今の医療制度の課題を見事に捉えた作品になっています。丁寧な書きぶりがしてあり、分かりやすい内容になっています。

秀作「枕団子」

野村　徹

生き別れた母親の消息を求める旅。三年以上前に亡くなっていたことを知り、母のため枕団子の供物を作ります。貴女から母へとの呼称の変化は、母からもらった命を大切にしていくことこそが、母への感謝であると悟った、心の変化を示しています。淡々と語る心情が切なさを感じさせます。

佳作「追憶の舞」

大野　みさゑ

亡くなった相手を一途に思うような烏との交流。烏の様子や動きと筆者の心の内とを重ね合わせながら描かれます。別れの烏の舞の美しさに心打たれる筆者の姿からは、心の動きまで伝わってきます。哀しく美しい作品です。

佳作「劇的なり！紫紺の綿入れの半纏」

松宮　信男

若い頃、有名な俳優との接点を作り出してくれた絹地の煌びやかな綿入りの半纏。この半纏が、有名俳優との会話を盛り上げ、筆者の生き方を、より確かなものにし、戯曲作家への道を開くことになります。半纏が効果的に生かされた作品です。

佳作「発芽率八十パーセント」

釼子　ふたみ

怪我で夢を断念し新しい道を模索する友人と二人、ひまわりの迷路を歩きます。即売会で買ったひまわりの種の発芽率は八十％。芽を出さない残りの二十％にも意味があることだと言い聞かせるように友に語り掛けます。これからの生き方を暗示するタイトルも秀逸です。

佳作「つるつるのすべすべ」

竹村　京子

秋の風景からの書き出しにより、何となく作品の中に引き込まれます。父の足の裏のあかぎれの思い出を通して、父と同じ体質を持つ自分を実感します。足の裏のあかぎれに焦点を当て話を進めており読みやすくなっています。父への愛情やテンポの良さを感じる作品です。

佳作「長松城の思い出」

樋口　健司

様々な情報が入り知識の深さが感じられる作品です。歴史好きな少年が長松城を求め訪ね歩きます。成人してからも関ヶ原の戦い等の歴史につなぎ、長松城の意義について検証しようとしています。年月をかけたスケールの大きい時空の広がりを感じさせる作品です。

審査員　今　津　佳代子
　　大　石　英　文

詩部門選評

どのように詩情のある絵にするか工夫のいるものです。現実と虚構のあいだに、生から死へ、また死から生へ、その潜在意識のあることで作品の風景に美をもたらし、味わい深いドラマになります。

文芸祭賞「あこがれ」

重苦しい時代だからこそ、この作品は抒情的幻想にみち、外景と内部の感情との照応で時代の扉をひらく鍵のような役目をしています。『ペダル』が未来へ言葉を運び明るさへと動きを止めることはありません。

秀作「イチョウ」

詩法に新しさは見あたりませんが、しかし

―壁のスクリーンに／墨絵に化粧したおまえの影―

二億年まえから「生きた化石」といわれて雄大な存在感を示しています。

秀作「流」

本質を語る洞察力によって、かえがたい作品として読み手の心をつかみます。

流れゆくのです。去ってゆくのです。去って消えてゆくのです。終連の

―木が／呼吸するはやさ／／花が咲いて枯れるはやさ／／水が凍っていくはやさ―

この独特な視点に魅了されます。

佳作「雨の色彩」

出だしがいいです。人間の心がすこし湿気をおびてやさしくなっています。その視点の景色には時代の速度とは異なるゆたかな曲線を描いて、詩のステージが展開しています。しかし終連の一行、誠実という言葉が気になります。

佳作「還暦」

素朴な言葉で心の想いをつづっています。還暦というと人生を達観する年令ですが、

―わたしは泣いた―

人間の意志とはほど遠い、大いなる摂理に気づく感慨ぶかい思惟があります。心の内側から発する人間の声に他ならないのでしょう。

佳作「黄昏の風景」

一連の二行目

―お隣の明かりが今夜は消えて―

このようにオトナリの言葉が、主観的な作品に距離をもたせてくれます。終連の一輪の真っ赤な薔薇の登場も、鮮やかな赤の生命力と求心力を呼びおこしています。

佳作「生きるとき」

妙にぽちぽちの擬音が気になり、心に残ります。地面の下の生命にも気を留めての山歩き、それはふり返える懐しさ、自己との語らいの潜在的な記憶の底を甦らせます。

佳作「この町」

小石を置くように言葉は淡々としています。その行間から人生の記憶に流れている情緒に気づきます。

―この町を／置いていく―
―この町に／置いていく―

この意味ぶかい言葉の切なさと諦めの中で人生を生きている人間がいます。

審査員　冨長覚梁
椎野光代

短歌部門選評

今年は一二三名、三五一首の応募がありました。若い人の応募も多くみられ、短歌の未来に明るい兆しが感じられ嬉しく思います。

短歌は定型詩です。なるべく基本型を守って、美しい言葉の調べを心掛けて下さい。その為に、まず作品を声に出して読んでみることです。

また、風景や事象を詠むだけでなく、そこに自らの想いや感動を込めて、それを読む人に伝えられたらと思います。

受賞作品はもとより、他の作品にも多くの佳歌が見られました。次回に向けて歌作りを楽しんで下さい。

審査員　山本次能
　　栗山繁
　　高瀬寿美江

俳句部門選評

新型コロナウイルス感染症が2類から5類となり、句会や吟行や俳句大会が本来の形で出来るようになりました。今回の文芸祭俳句に応募ありがとうございました。

上位入賞句は季語と切れがとても有効に働き、詩情あふれる作品となっています。

文芸祭賞

「一語づつ区切る宣誓雲の峰」

季語「雲の峰」を配することにより、夏の甲子園の場景が鮮やかに浮ぶ。

秀作

「山門の掲示の法語風光る」

季語「風光る」により、山門付近の明るさ、法語の内容まで想像できる。

秀作

「土けぶり一村叩く驟雨かな」

驟雨は「夕立」の傍題。土けぶり、叩く、かなとリズム良く力強い。

秀作

「正直に暮らしています水中花」

季語との取合せがユニーク。「水中花」は快い涼味を味わえる。

秀作

「初電話子牛は草と呼吸する」

子牛の誕生か。まだ立てずに牧草の上に蹲っている。「初電話」がめでたい。

健康に留意され、俳句をたくさん詠みましょう。来年も投句よろしくお願い致します。

審査員　田中青志
　　大堀武直
　　名和永山
　　名和よちる

川柳部門選評

選者講評（武山　博）

最近、どういう風の吹き回しかＮＨＫの朝ドラ「らんまん」を観ています。ご存知のとおり、植物学者の槙野万太郎を主人公にしたドラマですが、いつの間にやら主人公が入れ替わるように観えてしまいます。連続ドラマの特徴で、毎回見せ場を用意するためかもしれませんが、私としては、いろいろな人模様が浮かび上がってきて、おおいに興味を持って観ております。

いろいろな「人模様」と記しましたが、川柳を創るということは、まさにこの人模様を句にすることだと思います。政治家・事業家・職人・商人・教師・学生さらに階級・階層といった集団と何でも対象になります。

今回の投句数は五九一句でした。すべての作品がその裏側にいろいろな人模様を秘めていることを読み取れます。入選句として選んだ句は、その六％にすぎません。本来ならば、投句作品全部を取り上げるべきですが、割り当てられたページの少なさを嘆くばかりです。しかし、審査をする役目をいただいたことから、すべての人模様を観ることができたことを、幸せに思う次第です。

（令和五年九月十八日　武山　博　総評）

選者講評（草野　稔）

文芸祭賞

「伝令というポジションを駆け抜ける」

夏の甲子園。炎天下での全力プレー。多くの感動を頂きました。

その中に、地味ではありますが、伝令という役割にさわやかな笑顔で駆け抜けた少年の姿が今も目に浮かびます。

秀作

「産声は夢握りしめ無限大」

産声が届くと、安心とうれしさが広がりました。

よく見ると、紅葉のような手で、まるで夢を握りしめているように見えました。それがどこまでも無限大に感じました。下五の無限大という言葉に愛を感じました。

秀作

「世相切る忖度はせぬ太いペン」

忖度という言葉が、以前紙面を大きく飾りました。最近では、海外からの報道で、ジャニーズ事務所の性加害問題が明るみになり、忖度の文字が復活しました。「太いペン」で解決できればと期待しています。

審査員　武山博
草野稔
三浦珠美

秀作

「処理水をもらった海はまた荒れる」

処理水を汚染水と言って平謝りの大臣がいました。科学的なデータだけでは、納得いかない気持ちで海が荒れています。

秀作

「玉も歩も戦終れば同じ箱」

八十一の升目で四十枚の駒が、各々の役目を充分に発揮します。しかも敵陣へ乗り込めば、兵卒も将官に出世します。将棋は凄いゲームです。でも戦いが終ると玉といえども歩と一緒に小さな箱に納められます。アッ！「小さな箱」って、平和って事か！

秀作

「優しさのバトンを繋ぐボランティア」

今年また、大雨による災害が発生しました。経験した人でなければ理解できないかも。被害に遭った苦悩は、はかり知れない。そんな中、日本各地から優しいボランティアの人達がバトンを繋いで手を差し伸べています。ありがとう！